

中仙道紀行(一)

H U 生

昨年東海道へス旅行の企てられた際東海道視察旅行案内記をものしたが更らに木曾街道を辿り其旅行記を筆にして交通發展の葉草にもと志した處が種々の事情に妨げられて其意を果すの機會を失つたH U 氏より「中仙道紀行」の一稿を受けたれば茲に餘白を借りて掲載することとはなしぬ(H)

懷 舊

アンドレイ、シイドは彼の傑作『膺金作り』の中でかく言ふてゐる『地理の好きな兒は放浪性を暗示する』とそしてそれは旅行を好む者にもあてはめる事が出来る。人類學者は説明を與へるであらう『それは遊牧への懷舊である』と遊牧民の後裔か否かは此處では暫く別問題である。が人は一般に旅行を好む様である。吾々の先輩等は御伊勢參り御遍路、信仰を通じて國々を經巡つた事を知つてゐる。

極なき欲望の權化である吾等人間が現在の生活に満足し切れぬ時他にそらすべき何物かゞ要求される時、旅こそは唯一の救ひ手であると芭蕉は名文を以て吾々が意見を代辯して呉れた。また十遍舎一九は比類なき滑稽を以てそれを具體的に證明した。

獨逸の青年男女の間に『渡り鳥』と云ふ團體のあることは周知である。曾つて吾が國にも來朝した事のある團體であつた。これ等の若い人にはリツクサツクを背負ひ旅杖を手にシギタやマンドリンを抱え、簡単な炊事道具をも携え

て美しい野や、森へ漂浪の旅に出るのである。『渡り鳥』の群は何處に宿を求めぬであらふ。彼等は野山に臥し、月星の下に焚火して一夜を明かす事も珍らしくはなく、また夏の日には川に湖に浴して身體を鍛へ、ひたすら自然に親しみ史蹟を探り、古民謡を蒐め、時には音楽と歌謡の夕を催し又は獨逸の古劇を演じて幾許の旅費を作つては更に漂浪の旅を續けるのであるといふ。

我が日本にもこれに倣つた團體がある同じ様に『渡り鳥』と稱して私も團體の一員である。

世界大戦に打のめされ場所をせばめられた國民、然しそれには報復に燃ゆる血と、希望とがあらふ。

翻つて吾等日本青年は如何に思想は混沌として強力なる精神の何物もなく、あまつさへ幸運なる少數を除ひて大半は生活の不安におびやかされ疲勞し切つてゐる。一體吾々の進路は何處にあるのか、いやよそう吾々は議論が目的でなかつた旅の話をしてゐるのだ。

私が淺薄ながら書こうとする事は標題の話である。唐澤

さんや、田中さんがまだ土木局に居られる頃隨行した時の懷舊である。

思ひ出と云ふ事はなつかしいものである。私の生彩なき生活に於てさへ樂しかつた思ひ出は潤を與へて呉れる。就中寢醒の床や惠那峽からの豐麗な風景は田中氏の温情と共に永久に忘れる事の出來ぬ感激であつた。

岐 阜

中仙道と言へば江戸日本橋を起點とし、上州、信州、濃州を経て京都に達する百三十二里餘の道程である。此の中には有名なる木曾街道も含まれる。六十七次、二關所、五街道(註)の一に數へられる徳川時代の交通大動脈であつた。

(註)東海道、中山道(中仙道)、日光街道、奥州街道、甲州街道何れも江戸日本橋が起點であつた。

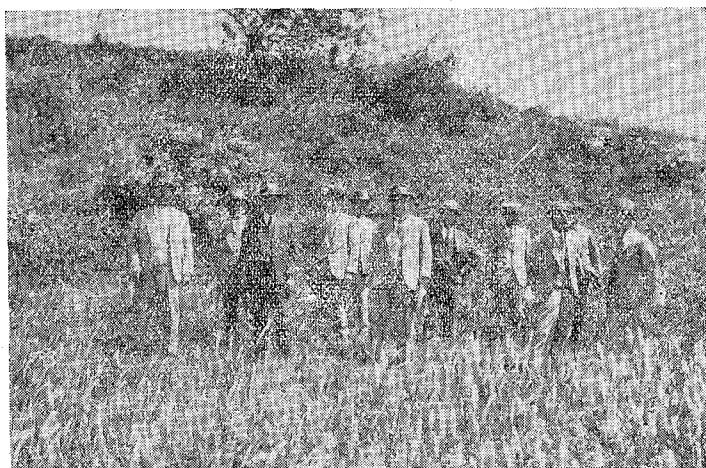
一行は天性の喜劇役者彌次喜多氏と同様に此の道順の逆コースを取つたのである。彌次喜多氏は大津からであつたが吾等は乗物の都合上ひとまつ岐阜に降り追々本街道に入

る豫定である。

夜東京驛を發つた列車は翌朝岐阜市に着く、車中唐澤さんの新知識は私達青年を謹聽せしむるものが多かつた。

岐垣國道は完成しかけて居た新裝花嫁の如き道路は、坦々と素直に伸び平面を突走る自動車の快速はさへぎられるものもなく誠に爽快であつた。

長長川に架された巨大な橋が半分肋骨を露わに然かも道路よりはみ出して居るので不審に思ふと『あれは伊勢電の鐵道橋になるべきもので伊勢電が工費の幾割かを負擔する約束であつたがそれを無視した、種々複雑な事情もあつて微妙な法律問題で今訴訟



と致へて呉れた、成る程國道に並行に鐵道敷地がチャンと

九八

中です』取つてあつた大部分の箇所線路が敷かれてあつた會社も意思はあつたのだらふ。が不況に禍されて中止せねばならなくなつたのだ、時代の風波は堪えず活動を續けて居るそれが此處にも見る事が出来る。

土 木 局 長 の 一 行

此處に一つのユーモアがあつた唐澤さんや田中さんの乗つたガソリン馬車が悪路に落ち込んでどうにも動きが取れなくなつてしまつた。アラビヤ馬にも匹敵すべき優秀車パツカードがである。此の悍馬は何んでつむじを曲げたのか今朝も長官を畑の中に抛り込んだと

言ふ。勿論、車自身も轉げ込んだのだが漸く附近の人足供

を驅り集めて引上げる事が出来たと云ふ『これで今日は二度目ですよ』吾等が運轉手は笑つた。

此の邊は河が多いのと地盤が割合に低いために洪水の時には直ちに氾濫する。堤防工事と河床浚渫とに莫大なる費用を食われると言ふ。

長良川は水青くなめらかな河であつた。青紗のペールを被ひで春眠醒めやらぬ感じであつた。香魚も住もう一遍彦丸達の活躍が見たい、その以前の黒い水面を走る紅の花火が見たい、素晴らしい衣裳であらふ。

多 治 見

岐阜市より太田町、それより一路多治見街道を進む、丘陵起伏赤砂と松との外にあまり變化のない此の路も自動車の怪速力は幾度か吾等が肝を冷やして呉れた、車が一回バシクした丈で大した支障もなく順路土岐平野を一望の下に見るす丘に出た。六月の空、頭も心もつかへる事のない青天井、豊饒なる日の光、その下に展開せるあらゆる色彩は

自らの遠近を作り吾等が胸襟を披ひて呉れる。更に展開せる聯想、練りひらけらるは正中の繪巻物である。

バタバタと足音がして門の外に、どかんといふ響き、ドドツと何かのぶつつかる音、それと共に邸内には、けたましい物音が起つて來た。

「父上」

「そちは搦手へ當れ」

國長は、胡籥を小脇に、弓を左手に庭へ降りると、中門の所へ走つた。中門を守つてゐる兵が、築地の上から、もう絃音を立てゝ居た。

「大勢か」

「はつ——よくは見えませぬが、千人餘り」

「千人な」

物語りの主は、此處の産である。烈々たる正義の觀念から、鎌倉討伐の義軍を走さんとして同郷の土土岐頼員が返り忠により、未然に發覺して、斬死を遂げた彼の館址が此處より幾許もなき處にある。

建武中興への先鞭とも云ふべき正中の變より、今日、何百年を経たであらふ、僅か一地方の豪族たるに過ぎなかつた。彼が運命は彼を一躍、英雄史上の、一ヒロインに据えた。——彼にヤマ氣があつたればこそ、左にあらす彼が烈々たる忠義の二字を正當に觀念し實踐したればこそ、そのたまものは今日にまで保存せられるのである。地下に彼の靈がまどろんで居るなれば彼はおだやかに、微笑んで居るに相違ない。かくして興へたるものは報ひられたのである。

吾等は今此の町の名産陶器工場に居る。捏ねられた山なす陶土瞬間に崩されて一定の型に丸められる。また次の山にかゝる。

手で型を取るもの、ロクロにかける者、採色をするもの、薬をかけるもの、かまに入れるもの、分業は最も效果的に能率を上げる。一行の見學したのは代表的の工場で専用軌道さへ持つてゐる。

曾つて名工柿右衛門が苦心慘膽の赤繪は今日では何の苦もなく子供の手によつて着色される。

製産品は陶器一般、コーヒーセット、西洋皿にも及び内地の需要もさることながら、海外にも盛んに輸出される。現在多治見では原料たる陶土に不足を告げ、遠く有田方面から供給を仰いでゐるさうである。交通機關の發達は遠隔の地も隣家と異なるところはない。

町長さんは町の陶器學校に案内して呉れた。先生や學生の製作品を見せて呉れ、その上此の學校を母校とする著名な美術家の氏名を得意相に語つた。

陶器陳列館では並べられた個々の陶器に就いて、色彩の狙い所、冥想的な形態、放心にして而も調和を巧みに取つた、構造等陶工が作品を通して何を思つてゐるか、何を言はんとするかを陶工に代つて町長さんが熱心に語つた。一遍に陶器通になつてしまつた。この邊の土中から出ると言ふ古代の壺は専門家の間では非常に珍重なものださうである。どうやらそろらしい形はして居つた。

大 井

舊中仙道は草津、守山、武佐、守山、愛知川、高宮、鳥

一行は元氣で昇つて行つた。が私は聊か苦しかつた、何

居本、番馬、醒ヶ井、近江柏原、

今須、關ヶ原、垂井、赤坂、美江

寺、河渡、加納、鶯沼、太田、伏

見、御嶽、細久手、大久手、大井

の順路で即ち彌次喜多氏は順々に

辿つて來たが、吾等一行は仕事の

都合上、太田で途を別れ多治見へ

寄つたのであるから大分遠廻りを

した事になる。行先は大井、彼等

とは大井で落合ふ事になるであら

ふ。

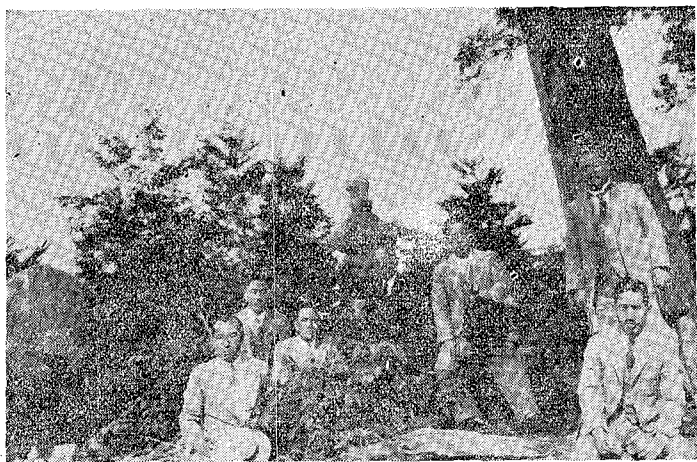
大井に近く二三丁手前のある山

腹に古のセンチメンタリスト西行

法師の塚あるを教へられて立寄り

見る事にした。車を降りて通りか

りの村民に尋ねたところ黙つて小高い丘陵を指示した。



には其の一町足らずの坂が一里もある様に思はれた。

西 行 法 師 塚 の 側 に 於 て

故なれば、私の靴は新調の眞新らしいものなので、足にしつくり來ぬ故に所謂底まめが生じそれが靴と摩れる度毎に痛むのである、少

行なからず閉口したが勝手な事は出來ない。私には重大なる役目がある。行程を記録すること、再び至る事がないであらう現實をタツチして、永久に現實ならしめようとする企即ち寫眞を採る事なのである。

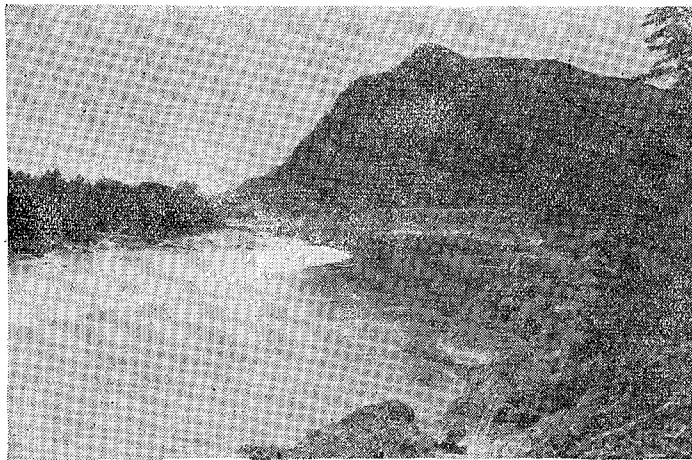
塚は丘陵の上にある。しかもその丘を構成する土は、砂利と漸く妥協した許りの、赤白土許りなので歩行が極めて困難であつた。私

六七十米の丘は獨立して居た。汗にぬれた肌を、風が快よく吹き通して呉れた。放尿の瞬間と同じ快感を味つた。

頂上は三坪位の平地で其處には天然石で石碑が二基つゝまじやかに立つて居た。一體どう云ふ意味の塚であらふ。西行の墓かそれとも法師が在任した庵跡か、何やら石碑には刻みつけてあつたが判讀しにくかつた。こゝで皆の寫真をとつた。

二三丁程歩めば既に大井町である。吾々は先づ木曾川をセキとめた驚異すべき、大堰堤を見物する必要がある。

吾々は此の壯大な規模を觀て一先づ驚く。自然に興へられたる力量は成る程諸動物に及ば



ぬものがあらふ。力競べて牛に及ばず走つて馬に及ばない、遊泳術、飛翔術は魚鳥に比すべくもないが、智力の發出するところに至つては自然さへも一應は

木 曾 川 下 流

かくの如く自由にする事が出来る。我々人類は何年か前まではランプさへも知らなかつたのである。洪水には絶えず脅かされ、干魃には徒に天の無情を嘆ずるより外はなかつた。事實は斯くの如く證明した。奔馬の如き激流をさへ羊の様に馴致せしめたと、これによつて水害干害を緩和し沃野千里の豊壤を約束することが出来る。更に重大なる利害を此の水の利用によつて得る事が出来る。現に得

て居る。我々に光明を興へる事だ。神話の昔より我々は光

明にあこがれて居る。また水の利用は工業の動力となつて
國運隆盛に拍車をかけるのである。工業の發達は貿易を逆
轉させる輸入品は輸出品と代つたのである。これ程國民に
福利をもたらすものがまたとあらうか。

だが遺憾とするのはこれを特定の者によつて占めんとす
る事のみ利用する事である。彼等の爲に悲しまねばなる
まい動ある所には反動があるからである。

此處に大井發電所並に堰堤の概要を關係文書から抜萃す
る。

(A) 概 要

1 位 置 大井發電所は岐阜縣惠那郡蛭川村字弓場に
在り、發電所の上流八五〇尺の地點より對岸惠那郡大井
町字奥戸間に木會川を横斷して堰堤（ダム）を築き本流
を堰き止む、取水口はダムの上流二五六尺の所に在り、二

條の隧道に依りて導水し減壓水槽の前方にて更に之を四條
に分岐し、減壓水槽より四條の鐵管にて發電所に送水し
四臺の水車を運轉し、總出力四二九〇〇キロワットを發電

す。

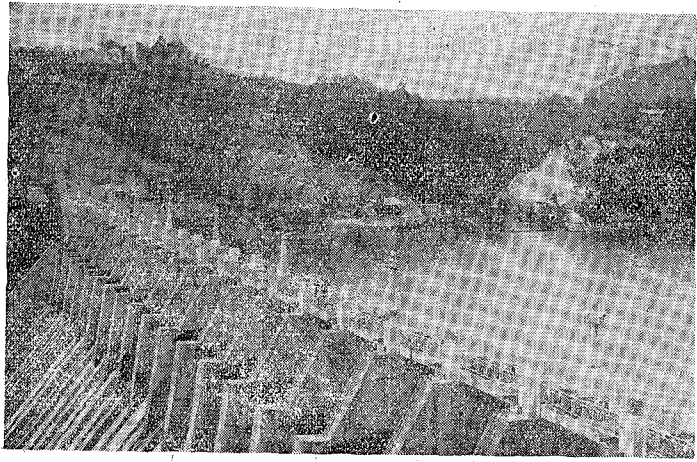
2 沿 革 大正五年十一月二十五日名古屋電燈株式會

社電氣製鋼所兩社の名義を以て中津町字駒場に取水口を設
け大井町字奥戸にて放水する計畫を以て河水使用の出願を
なす、大正七年九月二十七日木會川電氣興業株式會社の創
立と共に出願人に追加したるに大正八年七月二十一日に至
り名古屋電燈及び電氣製鋼所は出願人より脱退するに至れ
り、大正九年三月二日水力地點使用許可を得たるも其後諸
種の調査の結果ダム式を有利と認めたるを以て大正三年三
月二十六日取水口及放水路共大井町字奥戸に設くる事に變
更出願せり、次に大正九年十一月木會川電氣興業株式會社
及び日本水力株式會社が大坂送電株式會社に合併し大正十
年三月一日社名を現今の大同電力株式會社と變更し同年八
月十九日許可を受けたり。

然るに其後地質調査の結果及び落差の關係上發電所を蛭
川村字弓場に變更するの最有利なるを認め大正十年九月十
五日現在の如き設計に變更方を出願し大正十一年四月十七

日許可を受け同年七月七日實施の許可を得茲に工事に着手

するに至れり。



側面より見たる堰堤及び入口

(B) 水路

1 水利關係

流域面積 一三三・二九平方里
 貯水池面積 一七一町歩
 貯水池最長距離 二里三〇町
 總貯水量 一〇億立方尺
 有効貯水量 四億立方尺

湧水量 一三三〇立方尺
 平水量 三三七〇立方尺
 使用水量(最大) 四五〇〇立方尺

有効落差 一四〇尺
 馬力數(最大) 六九三〇馬力
 發電容量 四二九〇〇キロワット

2 堰堤

高 一八四尺
 長 一〇〇〇尺
 敷 一七四尺
 頂上の幅 一七尺

堤體總容積 二五五〇〇立坪
 築造材料 粗石コンクリート

貯水量調整門扉(テンターゲート) 二一門
 幅 二〇尺
 深 二〇尺

テンターゲート操作電動機 二一臺
 各一五馬力 二二〇三V 相交流
 ダムに使用せしセメントは約 二三萬樽
 工費 六三五萬圓

惠那峽

一行は此處の人工湖水の遊覽を試みる事となつた。瀟洒なモーターボートは、吾々を乗せて穩やかに動き出した。

素晴らしく珍らしい岩が眼の前に現れた。然しその隣は尙珍らしかつた次々に姿を現はすどの岩も、思はず讚辭を呈せざるを得ない神品である。私は最前人智を誇つた。今度は自然の前に頭を下げる。この様な景觀は人間の様な小手を倒影してゐる水の青さは、景觀を夥しく添へて居る自然の興趣を作るに人間が一の力を成したと言ふところである。或は逆説風に自然を人間が借りたとも云へよう。自然に力を借りる事なくしていつも美術は存し得ない。繪畫、彫刻建築等の造型的。音樂美學の瞑想的なもの皆然りである。自然を超越したる藝術それは數學的に不可能と考へる。

數知れぬ岩にもそれづくに名稱はチャンとあるのだ。あ

たかも人間の様に、岩は名前を欲しないだらう。欲するのは名付親の人間なのだ。人間はあらゆるものに名前をつける覚えやすい様に他の物と區別する様に懐しいものゝ表象に、或は想念の遊戯の爲に、

案内の女はその名稱の由來を一々につき説明した。水中に深く吃水を下ろして居る雄大なる軍艦岩、地面をそのまゝ立てかけた様な、塀風岩、源齋と呼ぶ盜賊の住家だつた故に忽ちその盜賊の名を受繼いだ岩、四角い岩が三つ重なつて真中が透えて居るところから品の字岩。

最も吾等が胸を打つたのは、額椽岩と言ふ岩であつた。巨大な岩壁の遙か上部に四角い、カンパスでも掛けた様によく浮き出て、その中に男女の姿が刻まれて見える。

風化作用によつて、或は雨の浸蝕によつてあの様な形が現れたのであらう。近寄つて見る事が出来るならば、男女の形か明確に刻まれてあるかどうかは疑問である。

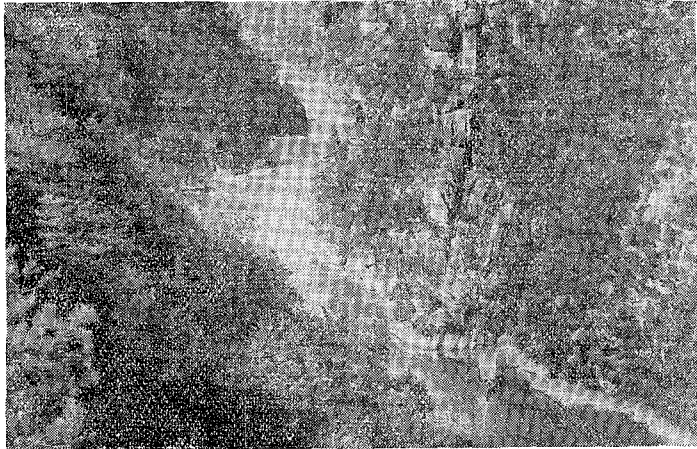
どうやらそうではないかと心して見るところにその様な形があらわれる私もその様に見えた多勢の人もそうであつ

た。

想像の豊かな種に屬する人間は此處にも居たと見えて額縁岩の由来を語り聞かせた。その語り手は恰も自分がこの物語りの主人公でもあつた様な感激と熱情とを持つて、哀々切々と話すのである。

男は武士である。女は藝者である。添ひ遂げられぬ結果は斷崖からの投身である。あの世で一緒になつた證據があつた岩である。あの岩の浮彫は現世の悲哀と未來に對する希望とを表現して居るのだ。

しかし大體傳説は象徴が先に生れて話は後から生れるこれもその類であらう。吾々が感動を受けたのはむしろ話し手にである、あの情熱を持つてすればと、



湖畔に天然記念物傘岩の奇勝がある。支流の名勝付知川

は時間の關係から探勝する事を得なかつた。

中津川

仙 郷 の 如 き 支 流 付 知 川

一行は中津町に於て一泊した。彌次喜多兩君も中津川で泊る所であつたが、福田村の久野屋儀平と云ふ人と知り合ひになつて其處でロハでとめて貰つた由であつた。

此の町を流れる中津川は惠那山の邊を水源となすものであるが、惠那山の地質が軟弱の爲に豪雨あらば土砂が流出して大なる損害を被ると云ふ昭和七年八月支流四ツ目川に突發した大津津浪は百三十

年來のもので中津川一帯は被害甚大であつたと聞かされ

た。

中津川改修工事及四ツ目川復舊工事並に水源地砂防工事等被害防止に著々計畫實行して居る様である。

此の邊の物資は殆んど名古屋から来るのださうである。

女の言葉なども名古屋の所謂『オキヤセ』言葉である。言葉尻へ殊更にモの音符を餘計入れるのも案外、愛嬌があるものだ「サウキヤイモ」御絹さんへも』此の言葉の中心地たる名古屋では國寶的言語を保護せよと力を入れて居る事と聞いた。

夕食後此の地方の俚謡だと言ふて「ホツチョセ」節と言ふを聞かせて貰ふた。

月の出頃と約束したが月は山端にワシヤ此處に様と旅すりや月日も忘れ、鶯が鳴く春ぢやそな

その何れもが青春を唄ふたものである。

しかしそれは決して陽氣の歌ではなかつた。歌詞もメロデーも何か遠慮勝であつた。

遙か歐洲人の様に、朗らかな、自然と若い戀のよろこび

を限りなく禮讚することは吾々東洋人には不向きなのであらふか、高いピアノの音よりも臍肢類の顫音が吾々には限りなき愛着を示すのであらう。

且つて私は鐘の説を聞いた事がある。

英語では鐘の音をカンポロジイと云ふし、佛蘭西ではもう少し優雅にカリリヤンと云ふと、しかし日本ではゴーンと餘韻を引く、日本人にはゴーンの音が何處の如何なる鐘の音よりも忘れ難いものである。

西洋には鳴鐘術と呼ぶ技術があるが、日本ではその様なものは存しない。西洋の鳴鐘術は多くの鐘を音の高低に並べて複雑な音色を出す煩鎖なものであるが、日本の鳴鐘は簡単に撞木を當てるのみである。然しながら吾々が寢床に聞きなれた所謂半夜の鐘聲なる牙を出すのは如何にその一擣が難いかを現實に體驗したと論者は述べられた。

食物の異なるが如く感受性も異なる東洋の淡泊は西洋には通用しないであらう。西洋人のカリリヤンはまた東洋人にはゴーンでなければならぬのである。

「如何に美はしく空に輝けばとて終りには地に沈むべき日ぞ、青春にしていく時ぞ、思へば惜しき過去なりき」樗牛のうたつた此の哀愁こそは、吾々同胞の根底を流るゝ感情なのである。

今俚語「ホツチヨセ」に耳を傾けるととき其の氣品高き歌詞と甘くして哀しい。音律は、蘇東坡が洞簫を聞くより尙吾等が望郷の想をそそるのである。

歌終つて一休みの後、唐澤局長が愉快な話をされた。局長の生地信州は、四方高山に包まれ比較的交通に恵まれなかつた。勿論昔の話であるが、地理的關係も魚類などは飛驒を通じて入つて來たものだそうである。例に洩れず鱒なども飛驒から入荷するので、此の地方の人は鱒は飛驒で捕れるものと信じて飛驒ぶりの稱があつたと、中津町の交通状態に比較して語られた。

木 會 節

「木會の木會の御嶽さん夏でも寒い袷を袷をやりたや足袋を添へて

「木會へ木會へ木會へと皆行きたがる木會に木會に木山があればこそ

「木會へ木會へ木會へと風ふく福島は夏は夏はよいと今朝の今朝の寢覺めの床のよさ

「こころ、こころ細いぞ木會路の旅は笠に笠に木の葉がまひかゝる

「權兵衛、權兵衛峠が海ならよからう主と、主と二人で船をこぐ

「空が空が近いか御嶽さんはいつも、いつも高風高吹雪七つ、七つ星見りやまだ夜は夜中雪の雪の御嶽雪明り

「惠那の、惠那の雪見て御嶽見ればまどもまども遙かや越の雪

「木會の、木會の御嶽朝焼ござる着けて、着けて出やせんせ袋と笠

「木會へナ、ナカノリサン、木會へ木會へとナンヂヤラホイ、積み出す米はヨイヨイヨイ、ヨイヨイヨイ、ヨイヨイヨイ、ヨイヨイ

伊那やナ、ナカノリサン、伊那や高遠のナンヂヤラホイ、サ餘り米ヨイヨイヨイ、(節の例)